

# 自然に生きるということ

山岳風景画と花鳥画をライフワークにしている宮本和郎氏の作品群を、北岳や八ヶ岳を望む境川村(現・笛吹市)石橋のアトリエで、まとめて拝見する機会を得た。そして、常に自然と対峙し、飽くなき探求心によって新しい墨彩表現を確立してきた、一人の画家の創作人生の軌跡に触れたような気がした。

彼がこれまでに描いてきた主題は、一貫して山里や山岳地に暮らす人々と自然の共存である。例えば里山の風景では、普通に目にすることのできる山野草たちがそっと添えられるように描かれ、さらに目を転じると3000メートル級の南アルプスやスイス・アルプスなどの雄大な山岳風景が描かれている。それらの絵画は、これまで見慣れた多くの油彩画とは異なり、淡い墨線に浮かび上がった山の輪郭と夕照に輝く稜線の朱色がとりわけ印象的な墨彩による日本画だった。澄んだ空気を纏い、北岳草やエーデルワイスといった高山を代表する花の女王たちが、まさに凛と佇むように描かれていたのである。

そもそも彼が長い年月をかけて探求し続けている墨彩画との出会いは、東京藝大の学生時代に遡る。このころ特に中国にルーツをもつ水墨画(没骨法)に興味を持った彼は、墨の表現を根本から学びながら、中でも付立て法と呼ばれる写実表現を確立した江戸時代中期に京都で活躍した丸山応挙に強い影響を受けたという。それは、具体的には光と影が織りなす空気感までをとらえようとする、新たな空間表現への興味とこだわりであり、その探求は今なお続いているという。

中でも華美とは言い難い一見ダークで独特な色調で描かれた花や植物は、ある意味において物静かな画家の性格や優しい人柄が、素直に画面に映し出されたようにも思えるが、実はそこにはもう一つの特徴が存在する。それは「目写」と自ら呼ぶ彼の空間観であり、例えば画面にうっすらと漂う残り香のような、あるいは画面を覆う空気のかすかな余韻にも似たような独特な表現である。それは、かつて19世紀から20世紀にかけて、新しい自由な表現を渴望した、ナイーブ派の画家たちにも共通した点を見出すことができるのではないだろうか。

1936(昭和11)年、多摩丘陵の麓の七生村(現・日野市)に、5人兄弟の3男として生まれた彼は、少年期には疎開や戦後の食糧難を経験しながらも、自然豊かな環境に育ったことで、植物や花は最も身近な食材にもなっていた。そしてこれらの経験が、その後の画家としての生き方に大きな影響を与えることとなり、やがて自然と一体化した生き方そのものを模索するようになっていった。

そもそも絵描きの道を選んだ直接のきっかけは、若い頃に川端画学校に学んだ経験を持つ絵を描くことが好きだった父親の影響が大きい。1957(昭和32)年に東京藝術大学美術学部に入學した彼は、前田青邨の教室で吉岡堅二、田中青坪に日本画の薫陶を受けた。友人の多くが院展や日展などの中央画壇に作品を発表していく中で、彼は既存の画壇や芸術界の潮流にはほとんど興味を示さず、卒業後は一時デザイン系の会社に職を得るが長くは続かず、その後も美術の非常勤講師や絵画教室を主宰しながら、今日までずっと山や自然と向き合いながら植物を描き続けてきた。

ある日の取材に彼は自分の表現について、「空間にある時間の流れ、光や空気の鮮度を大事にすること」そして「自然と一体化してきたとき、描き手は自然と平等になれる」と語っている。

かつて、山梨出身の画家で墨による革新的表現を確立した近藤浩一路も、「墨に五彩あり」という美しい言葉を残した。そして今年107歳でこの世を去った篠田桃紅も抽象表現にこだわりながら「色で具体的に表現するより、墨の濃淡だけで想像させる方がよっぽどいい」と、きっぱり言い切った。それは、いつも「自由に描いて生きたい」と願いながら、画家としての表現にこだわり続ける共通の生きる証に他ならないだろう。

さて、社会は今コロナ禍である。予想もしなかった様々な環境の変化や不自由さの中で、市民の目線は果たしてどのような反応をするのだろうか。アフターコロナ、ポストコロナの新たな時代を迎える中、これまでとは少し違ったものの見方や感じ方によって、宮本和郎作品とその感性に触れてほしいものである。

南アルプス市立美術館 館長 向山富士雄



1	4
2	5
3	

- 1.《雲ばしる鳳凰山塊》2009年
- 2.《チミギキョウとミヤマダイコンソウ》2003年
- 3.《牧草地の花 橙色のスカシユリ》2000年
- 4.《氷河を背にする村》1997年
- 5.《姥百合を育む森(カツラ原生)》2018年

## 宮本 和郎 画歴



- 1936年 東京都下の多摩丘陵のふもと七生村三沢(現 東京都日野市)に生まれる。
- 1961年 東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻を卒業。
- 1968年 創造美術展に出品('71年に会員推挙となるが翌年退会)。日本アンデパンダン展出品(以後毎年出品)。平和美術展出品(以後毎年出品)。
- 1976年 『若き抗夫の像』(橋本英吉著/新日本出版社)の表紙絵を描く。
- 1981年 しんぶん赤旗読者欄に週1回連載の「四季の花」(文・山荷花子)の絵を担当。
- 1983年 宮本和郎「四季の花」展(新宿/朝日生命ギャラリー)。
- 1984年 宮本和郎「続四季の花」展(新宿/朝日生命ギャラリー)。
- 1985年 画文集「四季の美り」原画展(大阪市/センチュリーギャラリー)。
- 1989年 墨で描く「花の心」宮本和郎展(岸和田市/岸和田市立文化会館マドカホール展示室)。
- 1990年 墨と彩りで描く宮本和郎展(山形市/生協共立社山形、鶴岡市/生協共立社鶴岡)。
- 1991年 地蔵院(埼玉県川口市)本堂の樓2面に蓮華園と水芭蕉園を制作。他、掛軸2点も描く。東郷寺(東京都府中市)新書院落成に伴い四季の花の掛軸4本や蓮華園等10本を描く。
- 1993年 墨で描く山の花展(南アルプス市/南アルプスアールペンパザ)。
- 1996年 宮本和郎展(鶴岡市/生協共立社鶴岡、鶴岡市/鶴岡協同の家こびあ2階)。
- 1997年 芳山月刊誌「登山時報」の表紙絵を'99年までの2年間担当。
- 1998年 月刊誌「燈」の表紙を担当(～現在まで)。
- 2001年 笛吹市境川町大黒坂の家を借り、月に数日を過ごす生活を始める。
- 2003年 「宮本和郎 甲斐・南アルプス スイス・南アルプス」展(南アルプス市/芦安山岳館)。
- 2004年 宮本和郎日本画作品展(笛吹市/境川村総合会館ギャラリーさかいがわ)。
- 2005年 日本、山梨、スイス・アルプス「宮本和郎日本画」展(甲府市/山梨県立美術館県民ギャラリーC)。
- 山梨日日新聞文化欄に「山里の彩譜(つた)」を16回にわたり連載。
- 2009年 山里を視つめて(笛吹市/春日居郷土資料館)。
- 2013年 日本山林美術協会に入会。山業水明の彩墨画家・宮本和郎展(府中市/府中市美術館市民ギャラリー)。墨和会・宮本和郎連立展(甲府市/山梨県立美術館県民ギャラリー)。
- 2018年 スイス・アルプス 山と花の日本画展(ミュンヘン/ミュンヘンスポーツセンター)。
- 2019年 スイス・アルプス 山と花の日本画展(ミュンヘン/ミュンヘンスポーツセンター)。
- 2020年 スイスと日本の山里集落 宮本和郎日本画展(府中市/府中市美術館市民ギャラリー)。
- 2021年 円乗院(東京都世田谷区)の襖絵4間8枚(水芭蕉園)墨絵が完成。

その他 墨で描く「四季の花」(文・山荷花子)、墨で描く「四季の美り」、四季の花シリーズ「墨で描く山の花」、画集「花(春・夏編)」、「花(秋・冬編)」、「花の歳時記」、画文集「スイス・アルプス花の旅」、「山里の彩譜(つた)」など著書多数。



## 交通のご案内

- 電車・バス JR中央線 甲府駅下車(バス利用35分) 山梨交通バスターミナル 西野經由小笠原下仲町行き「市立美術館」下車 十五所經由鯉沢営業所行き「戸田町」下車 徒歩10分
- 自動車 県道42号線沿い 中央自動車道 甲府昭和ICより20分 県道42号線沿い 中部横断自動車道 白根IC・南アルプスICより5分 県道42号線沿い

美術館公式HPはこちらから <https://www.minamialps-museum.jp/>

美術館公式facebookはこちらから <https://www.facebook.com/235851723615051>

\*各種イベント ホームページ・フェイスブック・インスタグラム・ツイッターでお知らせしますので、ご確認ください。  
\*新型コロナウイルスの感染拡大状況により、臨時休館する場合があります。予めご了承ください。  
ご来館前に当館ホームページ等をご確認ください。



南アルプス市立美術館  
MINAMI ALPS CITY MUSEUM OF ART

〒400-0306 山梨県南アルプス市小笠原1281  
TEL 055-282-6600 FAX 055-282-6601

